人間ドックで

2008 年 7 月、4 年ぶりに人間ドックに入りました。私は異常なしでしたが、周明は肺にガンらしきもの認められるので、8 月精密検査のために入院しました。細胞組織を調べて、ガンに間違いはなく、しかも珍しいタイプだと言われました。小細胞ガンの中でも「多形ガン」と言うのだそうです。どの本を見てもそういう名は見当たりませんでした。そのことがガンと言う病気に加えて私の不安を大きくしました。

お姉さんへの手紙①

お姉さんへ

２００８年8月２６日

朝夕涼しくなりました。そちらはいかがですか？

７月に４年ぶりに人間ドックを２人とも利用しました。思いもかけず周明さんが肺がんとわかり、戸惑っています。８月中の検査などでの結果が２５日に知らされました。そこで新たに副腎への転移、リンパへの転移によるリンパ節発生などの説明を受けました。これから投薬治療に入るため、同日今週中に入院するための手続きを済ませ、現在ベッドの空きを待っているところです。

本人は、厄介な病気になって済まない。悔しい。と言いながら、孫の行く末には心を痛め、１０年は生きさせてくれとドクターに頼んでおりました。そのためにどんな治療も厭わない、頑張るからと、逆に私たちが励まされます。一日も早い最適投薬の実施で、進行をとめ、少しでも長生きさせてあげたいと思っています。遺り残したことが、また、一緒にしたいことが山ほどあります。一人になると、つい弱気になってしまいます。ごめんなさい。

とりあえず、ご報告まで。皆様もお体おいといください。それではまた。

倫子

ガン治療

転移のあるなしを調べるペット検査と言うのがありますが、大きな病院でしか調べられません。8 月末検査の結果が出ました。副腎に転移が認められ、9 月から抗癌治療のため、入院することになりました。強い薬ですので、副作用がどう出るか 2 週間以上様子を見ました。あとは通院治療で毎週血液検査とレントゲンをとり、それをもとにした診察を受けに通いました。「風邪だけはひかさないように。37 度を超える発熱の時には連絡を下さい。」と言われ、室内温度、外出に気を使いました。

3 週間が 1 クールで点滴を打ちます。2 週間は気分もすぐれず、食欲が落ち、ムカムカ感がとれません。3 週間目にやっと普通にもどれたように思います。できるだけ明るく、いつもと同じように接しましたが、眠る顔を見ながら涙が止まりませんでした。夜になると余計不安がふくらむ気がしました。

少しの希望

２回目の点滴がすんで 2 週目の診察のとき、ガンの影が小さくなっていました。私たちは喜びました。「ここで死ぬわけにはいかん。あと 10 年生きさせてくれ」彼は誰にともなくベッドに寝たままつぶやいていました。「しんどくても治療頑張るから。」私に向かって言う言葉は涙声でした。少しの希望は持ちながらも悔しかったのだと思います。

増血剤

３回目の点滴の２週目、診察の結果白血球の数値が限界を超えて減少していました。その日増血剤を打ちました。その 1 週間後、急な発熱がありました。即入院でした。4 回目の点滴はなく、飲み薬にかわりました。点滴よりも今度の薬のほうが体は楽なようでした。庭に出たり、バイクに乗ったりでいつもにもどったようで、不安ながらもうれしく思ったものです。

すい炎

12 月 22 日月曜日、早朝 2 時に腹痛を起こし、痛みに耐えられないというので、市民病院に駆け込みました。痛み止めを頂いて、何とかおさまりましたが、昼前また腹痛が始まり、倉敷中央病院に向かいました。血液検査の結果、炎症の数値が高く、入院となりました。すい炎と診断されました。

すい炎の治療は絶食で 24 時間点滴です。その間ガン治療はできません。そこが最大の心配でした。体の衰弱とガンの進行が気になりました。何かがけっぷちに立たされたような気がしました。

暮れと正月はみんなと過ごしたいと、無理をお願いして、大晦日早めに点滴を切り上げ、久しぶりに家に帰らせていただきました。でも元旦には昼までに病院に帰らなければなりませんでした。

彼は寂しがり屋でした。ほとんど毎日私は病院に行っていましたが、もう帰るのかといつも言います。それに帰る時には必ず車の見える窓に姿を現します。日中だと私が見えなくなるまでそこにいます。でも夜の闇の中では「暗くて見えない、どこにいるのかわからん」とかけてきますから、「ここにいるよ」とライトを点滅させます。「見えた、見えた。気をつけて帰れよ。」の言葉に「お休み。よくねるんよ。」と応えて車を出します。帰る道々いつも胸が締め付けられるようでした。

1 月 10 日には退院しました。血液中の膵液濃度が正常値に近くなったからです。でも 20 日間の絶食は彼の体力を奪いました。点滴治療も始まりましたが、体の衰弱が目立ちました。

お姉さんへの手紙②

お姉さんへ

２月６日

少し暖かくなりました。そちらはいかがですか？
百合子さんを１月４日まで帰宅させるように当初計画しておりましたので、周明さんが退院してからいつか埋め合わせを計画しなければと思っておりましたが、やっと月末に２泊３日で実行できました。

１月にはいってから茶谷さんのほうからお年賀のお菓子が届けられましたので、なごみの施設にもって行きました。月曜日と金曜日には赤い屋根の家のほうにデイサービスを利用して行っています。空きができれば入れてもらうように再度お願いしてあるところです。順調に過ごしておられます。

帰宅後は、いつものように、ご自分の部屋から出てこられることはなく、トイレと部屋を往復しています。下着は、失敗があったりしますので、紙パンツを使用しました。食事はやや少なめですが、おやつはしっかり食べられます。写真を撮りましたので、添付します。

周明さんは、すっかり気が弱くなり、葬式の話をしたり、娘一家をよろしくと言う類の話になったりします。彼の意向を尊重して意に沿うよう私は頑張っていこうと思っています。今では立ち上がるのにも決断を要するようになりました。薬のせいで食後はよく眠るようになりましたが、生き生きと活動する時間が少なく、言葉も少し出にくくなり、自分でもろれつが回らないほどではないがおかしいなと言っています。父も母も失った悲しみは癒えていますが、再びその思いを味わうのかと思うと私自身いたたまれませんが、自分の死をどこかで自覚して悔しい思いをしている彼を思うと、しっかりしなきゃと自分に言い聞かせています。

またお便りします。今日はこの辺で。

倫子

転移広がる

すい炎になってからの検査が転移の可能性を示しており、退院後の検査と合わせて担当医から説明を受けたのは 2 月 19 日のことでした。「転移が認められます。すい炎を引き起こしたのはガンの転移によるものと思われます。体の衰弱を思えば、ガン治療をこれ以上続けるのは適切でない」という判断をいわれました。瞬間「この人の命は後がない」と思いました。

お姉さんへの手紙③

ひとみお姉さんへ

2月22日

みなさん元気でおられることと思います。周明さんの好きなチューリップの球根を、ところ狭しと庭に植えたのに、もう暖かい毎日が続く中でぐんぐん芽を出し花をつける用意をしていると言うのに。咲くのを待たずこの人を逝かせたくない。そう思うたびに胸にこみ上げてくるものがあります。

膵炎での入院は、1月10日の退院まで、20日間でした。そのときとったMRIやCTの結果と比較するために先週13日におなじ検査をしました。19日の診察のとき結果について説明があり、私、富美ちゃん，純奈と 3 人で聞きました。その内容は別紙のとおりです。

周明さんの誕生日には帰るからと言っていた典生を週末帰らせました。今週末も帰ると言っています。気になるのだと思います。

日に日に弱まる周明さんを見ると、驚きとつらさが倍加してきます。いずれにしてもいつどうなってもおかしくない状態になりました。現在は、訪問看護を受けながら、限られた時間を共に過ごしています。

まずは、ご報告まで。

倫子

別紙

２月１９日倉敷中央病院診察と検査結果の内容について

MRI,　CT　検査の結果について以下の説明を受けました。

① ８月末 4.5 センチあった左肺のガンは、8.5 センチ大に増殖している。勢いが強い。

② 1 月 15 日に脳へ照射した放射線治療については異常はないものの、脳への転移が新たに見られる。

③ 他にも大腸内壁、副腎、筋肉内への転移もみられ、検査では見られない他の部位への転移も予想される。

④ 体のだるさ、歩行の困難さ、脱力感など検査で疲れたことも考えられるが、ガンによる影響と考えられ、体力の衰退を思うとき、これ以上がん治療を続けてもかえって本人のしんどさを増すものと考えられる。従ってがん治療は打ち切る。

⑤ 食欲のなさについては、生命維持のため、入院すべきと思うが、本人は在宅を希望している。地域のドクターに点滴してもらうなど当面の対応は考えられる。転院するにしても、倉敷中央に入院後、希望の病院に転院という形がスムーズに運ぶと思う。

⑥ 余命 1 ヶ月だと思う。それも厳しいかもしれない。

2 月 20 日夕飯のテーブルです。
　みんなが集まるところで眠りたいと、いつも台所に居ますので、こちらにベッドを移動しました。

お風呂には、私が介助して入ります。
握力も落ち、ふらつきもあって危険ですから。風呂上りはとてもさっぱりしてます。

周明通院拒否

「もう病院にいきたくない」彼は在宅看護を望みました。私は何かあったとき、対応できなければどうするのかという不安と迷いがあって、ホスピスケアーを受けるようにとの担当医の入院の勧めをどうしたものかと考えていました。でもその話をしたときの「そうか、やはり入院しなきゃならんか」と言った顔つきがとても心にこたえてつらく、「わかった。家で頑張ろう。」と決心しました。優柔不断な私の気持ちを支えてくださったのは玉島共同病院の先生と、訪問看護センターの皆さんでした。何かあってもすぐ飛んでくることのできる近さを重視して、市内中央病院の訪問看護センターに引き継がれました。亡くなる 27 日まで誠意に満ちた対応と在宅看護への励ましをいただきました。彼の望みどおりに在宅でみんなに囲まれて最後を迎えることができて、それだけが良かったと思えます。2009 年 2 月 27 日午後 4 時 40 分彼は静かに息を引き取りました。ひと月後の満 64 歳の誕生日を目の前にしていました。